

地理学入門 [自然地理学]

菅　浩伸　Hironobu Kan

後期・水曜１限／後期・水曜２限

1. 学際科学としての「地理学」

「地理学（Geography）」は、「地（ge）」を「記載する（graphy）」学問です。地図をつくり土地を記載するという、紀元前からつづく活動に起源をもっています。地表には地形、気候、海洋、動植物、人間の社会や文化などが存在しており、それらが全て地理学の対象となります。地球上の万物、森羅万象を一括して理解することは難しいと思いますが、それにチャレンジしようという姿勢が、地理学が目指す姿勢なのです。

現代科学は要素に分解することで発展してきたという側面があります。しかしこれらの科学的理解は、総合的な視点をもって統合され理解しなおされる必要があります。複雑で微妙なバランスの上に成立している「環境」に対する理解はその一例でしょう。細分化した現代科学の中で、地理学が理想とする「複合体をまるごと理解」しようとする姿勢はユニークな存在です。しかし、現代の我々にとって必要な視点ではないでしょうか。



【写真：ミクロネシア連邦・チュック環礁のサンゴ礁。菅　浩伸撮影】

地を記載することから始まった「地理学」は「場所」の科学です。どうしてその「場所」に、そのような現象が現れるのか。「場所」がもつ意味を学際的に捉えることを地理学は最も大切にしています。地球上のあらゆる「場所」が等しくないこと、これが自然環境や社会にダイナミックな動きを生じさせていることに想像を巡らせてみてください。

2. 自然環境から世界をみる自然地理学の視点



現在の環境がいつごろから、どのようなメカニズムで発生してきたのかを理解するには、関連する諸科学を援用しながら総合的に理解する必要があります。地質学や気象学、水文学、生物学、生態学などの自然科学がそのヒントを与えてくれます。そして、人類活動がはじまってからの時代を理解するには、考古学、歴史学、文化人類学、社会学、経済学、政治学などの人文・社会科学が示唆を与えてくれます。自然地理学では、まず、自然科学の知見を基に、現在の地球上でみられる自然環境とその分布や動態について明らかにします。そして、その上に成立する人間活動（文化、社会など）についても、自然環境との関わりに注目しながら捉え

【写真：西オーストラリア・シャークベイ。果てしなく続くビーチは単一種の貝殻でできている。おどろくべき種多様性の低さは、この湾の特殊な環境を物語っている。菅　浩伸撮影】

ていきます。

この講義では、地球の基本的な構造をはじめとして、現在の自然環境（地形の分布、大気・海洋循環と気候、海水温の分布と熱帯低気圧、エルニーニョとラニーニャ、災害など）に関する基礎知識についての解説を挟みながら進めます。また、分野をまたがるトピックも取り上げます。例えば、地球上でみられる現在の生物分布には、長期にわたる大陸の移動と海陸分布の変化が関わってくる場合があります。そして、それらが人類の経済活動によって攪乱されている実態も紹介します。学際的な思考を養う機会にしてみてください。

3. 地球環境と社会「我々はどのような社会をつくるべきか」

人類の生活はその場所の自然環境に寄り添いながら長い時間をかけて進化してきました。しかし、現在の人類活動は自然環境に大きな影響を及ぼすほど急速に巨大化しています。地球温暖化が進むと予想される今後、海面上昇に対する沿岸域の脆弱性が世界各地で懸念されています。この講義の一部では太平洋・インド洋の環礁国（モルディブ共和国、ツバル国、キリバス共和国、マーシャル諸島共和国）を例に話を進めます。これらの国々の国土は、環礁と呼ばれるサンゴ礁の上に載る低平な洲島で構成されています。海面上昇が環礁国の国土とインフラストラクチャーに甚大な被害を及ぼし、国家存続の危機にさらされるとの懸念は、1989年にモルディブ共和国の首都マーレにて採択された「マーレ宣言」以降指摘され続けており、2013～2014年に刊行されたIPCC（気候変動に関する政府間パネル）第5次報告書でも大きく取り上げられています。これらの環礁国では、今後の温暖化対策として防波堤建設などとともに将来に備えた国民の移住などが試みられています。

環境問題は自然科学の問題と捉えられがちです。しかし、実際には社会の変化などによって引き起こされている学際的な問題群です。しかもグローバルな問題からローカルな問題まで、様々なスケールを持った問題群です。複合体をまるごと理解しようとする地理学の視点から考えてみましょう。皆さんの時代に人類がどのような社会をつくって、どのように生きていくかを考えるための基礎になればと願っています。



【写真：モルディブ共和国のティラフシ島。サンゴ礁を埋め立ててつくられた工業団地と野焼きのゴミ処理場。菅浩伸撮影】

担当教員プロフィール

かん　ひろのぶ
比較社会文化研究院（地球社会統合科学府）教授。専門は地形学。特にサンゴ礁地形学。
最近の研究：マルチビーム測深を用いた浅海底地形学の開拓と防災・環境科学への応用。
共著：『自然景観の成り立ちを探る』（玉川大学出版部、2013年）
『日本の海岸』（朝倉書店、2013年）
『Encyclopedia of Modern Coral Reefs』（Springer, 2011年）
『温暖化と自然災害－世界の六つの現場から』（古今書院、2009年）
『日本の地形1　総説』（東京大学出版会、2001年）　など
論文：Submerged karst landforms observed by multibeam bathymetric survey in Nagura Bay, Ishigaki Island, southwestern Japan. *Geomorphology*, Vol.229, p.112-124.（2015年）など